春まだき

（Ｉ）
詩集　（四年～卒業）

柊実真紅
（とうみ・まこ ）
ａｓ
（霧樹里守）
（きりぎ・りす）

目次

★★【　移転　の　お知らせ　】★★ 1

４～５年生

（４～５年生） 5
詩 6
詩の時間　（１.） 7
詩の時間　（２.） 8
水のとびこみ台 9
（無題） 10
私の目。. 11
自分の世界 12
ゆめをおいかける 13
うそつき 14
うらぎり 16

６年～卒業。

（６年～卒業） 19
六年の最初に 20
空 21
めだとうせいしん。. 22
心が 24
詩 25
ずっと昔 26
光化学スモッグ 27
シャワー 28
２５ｍ 29
七月だというのに、. 30
遠く。. 31
朝の不思議事（ミステリー）。. 32
わらべうた。. 33
わらべうた。（２） 34
ふうりん。. 35
空　１. 36

空　2. 37
洋服ぬい。 38
考えること。 39
冬　I 40
冬　II 41
ある冬の朝 42
しも　I 43
「あたしの手」　（1年、とおやましがこ） 44
炎 45
友だち　I 46
私 47
朝 48
友だち　III 49
男の子、 50
がまん。 51
どうして？ 52
（無題） 53
. 54
六年間 55
（無題） 56
（無題） 57
よるねず本読む子への罰。 58
. 59
卒業前の一年間 60

はんぱな春休みに。
（はんぱな春休みに。） 63
シュークリーム 64

奥付
奥付 67

★★【　　移転　の　お知らせ　　】★★

あいすみません。

こちらへ置いておいても、まったく売れないので、

すこしでも日銭を稼ぐ？ ため...（失業中なので！？）

こちらへ移転しました。

（詩集１）　　『　春まだき　』

https://novelpia.jp/novel/3935

お立ち寄りいただければ幸いです。

（２０２３年０３月０２日）

４～５年生

（４～５年生）

（４～５年生）

詩

作文よりはかんたん。

読書よりむずかしい。

それが、詩。

詩の時間　（１.）

みんなうつぶせになっている。

でも、いびきの音はきこえない。

えんぴつつかんでる人。

まっしろなノートとにらめっこしてる人。

よそみしてる人。

しゃべってる人。

詩をよみかえしてニタニタしてる人。

いろんな人がいりまじってる。

それが、詩の時間。

詩の時間　（２.）

「思ったことをそのまま書けばいい。」

詩を書く時のナベセンセイの意見。

わたしもさんせいだ。

でも、

「きょうしつの中じゃ考えることないョ。」

これがわたしの本心だ。

先生!!

詩の時間は外につれてって下さい！

水のとびこみ台

水が屋根から落ちてきて

ポチャンと葉っぱにのっかった。

葉っぱがしなって水玉が、

ポーンと空にはじかれて、

池にポチョンと飛びこんだ。

葉っぱは、水の飛び込み台。

（無題）

リンドグレーン全集、

ナルニア物語り、

アーサー・ランサム全集、

私の好きな本の名前。

リンドグレーン、Ｃ．Ｓ．ルイス、アーサー・ランサム、

私の好きな作家の名前。

この人たちの心は、

きっと にじ色に光っている。

私の目。

ノートのひょうしをじぃっとみる。

いろんな人がいる。

でも、

ほかの人には見えないんだ。

私の目。

とってもふしぎな、私の目。

自分の世界

マーが男子をりこうにしようとする。

いくらがんばってもむり。

学校にいる間、

男子は半分しんでいる。

女子だって同じこと。

学校から出て、

自分だけの世界に入るまでは、

みんな半分しんでいる。

それでも、

あきらめずにがんばっている。

学校でも生きていられるように。

でも、

それはむり。

自分の世界にいる時に、

他の人としゃべったら、

自分の世界はなくなってしまうから。

ゆめをおいかける

まわりの人はあきれていう

「ようちっぽい」と。

でも私の心はずーずーしいので

そんなことではビクともしない。

私は

ゆめをおいかけることを やめない。

うそつき

うそついて、

平気のへいざで、

ひみつをしゃべる。

小沢さんのうそつき、

中津さんのうそつき。

大、大、大っきらい。

小沢さんが一番悪いんだ。

ふだんおとなしそうな顔をして、

心の中は、うそだらけ。

始めっからうそつきのほうが、

まだましだ。

本気で信じておしえたのに、

平気の平ざでうらぎって。

わたしが知らないと思ってるんだろう。

あんたたちは悪まだよ。

うさぎの皮かぶった悪まだよ。

もうぜったいに、口きいてやるものか。

あしたの朝、「おはよう。」なんて、

声かけてみろ。

ほっぺたひっぱたいてやる。

殺されないだけありがたく思え。

そりゃあ信じたわたしも悪いけど、

うさぎの皮かぶって、ねこなで声だして、

化物、うそつき、悪ま！

おまえなんか、しねばいいんだ。

うらぎり

ひみつの話をしゃべる人、

まっていたのにこっそり他の人とかえる人、

かげで悪口言う人、

わたしはいつも うらぎられている。

６年～卒業。

（６年～卒業）

（６年～卒業）

六年の最初に

気がついたら六年生になっていた。

ねている間にかわっていた。

三月のカレンダーが終りに近ずいたころ、

私はまだ五年生だった。

荷物運びと大そうじの中で、

私はまだ五年生だった。

カゼをひいてねているうちに、

いつのまにか六年生になっていた。

ほんの少しの間に

五年から六年へかわった。

起きた時には六年生になっていた。

空

コバルトブルーの空を

うす青色した雲がとりかこんでいる。

地図のように見える。

空は湖、雲はりく、

地図がゆっくりとうごく、

形がかわっていく、

太陽が金色に光っている。

ロケット形の雲が、

宇宙をめざして飛んで行った。

めだとうせいしん。

大そうじの時に白倉さんが言いました

「ツッコはめだとうせいしんだよ。」と

私はそんなつもりはないのです。

最高学年になったから、

いっしょうけんめいやっているのです。

やっていると楽しいから、

いろんなことをやるのです。

めだつつもりはありません。

ふつうにやってるつもりです。

まわりの人がやらないから、

私がめだつだけなのです。

私がめだとうとしているのではないのです。

回りの人がさぼろうとするから、

私がめだつだけなのです。

自分がさぼっているのに、

私がひやかされるのはなぜですか。

私はなにもしていません。

働いているだけです。

働いてはいけないのですか？

私は悪いことをやっているつもりはありません。

ごかいしないでください。

心が

私は、あまり人気はありませんから、

一人でいる方が多いんです。

だれかとつきあうと、

あとに悲しみがのこるから、

１人でいる方が気楽です。

空想している方がすてきです。

私は 頭も顔もあまりよくないから、

思うとおりに行きません。

でも、心はどこまでも行けます。

本の中でもゆめの中でも、

大宇宙のかなたまで

だから私は、体より心を動かす方が好きです。

でも、ときどき、さびしくなります。

仲間がいたら、どんなにいいかと思います。

ゆめが本当になったなら、

詩

詩が好きです。

詩をかくと自分の心がよくわかります。

詩をかくと心がおちつきます。

だから詩が好きです。

ずっと昔

ずっと昔、てんこう生がいました。

なかなかかわいい子でした。

いっしょに帰るやくそくをしたのに、

その子は他の人と帰りました。

しょうこう口でまっていたのに、

その子はもどってきませんでした。

先に帰ってしまいました。

私は

泣いて帰りました。

光化学スモッグ

** しんこきゅうをしたら、のどがいたくなった。**

** まったく大人はずるいのだ。**

** 子供は未来へ進むためにいるのであって、**

** 大人のまちがいをなおすためではない。**

** 大人は子供に正しい事を教える必要はあるけれど、**

** まちがったお手本をしめしたりする必要はない。**

** まったくずるい。**

シャワー

ああ、なんて気持ちがいいのかしら。

にげだしたいほどこわいのに、

空から光がふってくる。

手をのばして体じゅうに光をあびた。

にじの上にぽっかり青い空がのぞいていた。

つめたい。

２５ｍ

足が重い、手が重い、体が鉄になったようだ。

うごけない、うごけない。

息がくるしい、目がみえない。

白いところを進む、線にそって進む。

ただ前へ、ただ前へ、

手がついた。泳ぎぬいたんだ。

苦しい。

七月だというのに、

雨がふる、雲がわき、風がふく。

ときたま顔だす太陽は

あっというまに雲がくれ。

重苦しい風が

私の息をとめる。

七月だというのに。

遠く。

頭の上に空があり、

空のむこうに宇宙が広がる。

宇宙のかなたに星があり、

星は集まり広がって行く。

終わりにぶつかることはない。

どこまで行っても終わらない。

朝の不思議事（ミステリー）。

朝、日がのぼり、目をさます。

小鳥は歌い、花ひらく。

だれがくれたか おくり物。

朝の小さな不思議事（ミステリー）。

わらべうた。

「一がうわさで、二できらわれて、三でほれられ、四でかぜひいた。」

だれが言ったか、この歌を、

くしゃみするたび思い出す。

くしゃみ三回、気をつけよう。

わらべうた。（２）

昔話に、言い伝え、

古い話は数々あるが、

うそか本当かわかりません。

もとがなければ話はできない、

昔話にあったこと、

今またないとは言いきれぬ。

だれが言えるかウソだとは。

ふうりん。

ふうりん チリリン 歌、うたう。

チロリン、リンと 歌うたう。

明るい 声を 風に のせ、

静かな 静かな 子守歌

聞いているのは 空の星

チリン チロン チロリン

チリン チロン チロリン...

空　１．

地球という名のビー玉の中から、

私は外をのぞいていた。

外側は広く、そして青かった。

いじけた黒雲が、

すみっこにはいつくばっていたので、

やさしい太陽が、

黄金（きん）の光を投げかけてやった。

空　２．

ねころがって空を見ていたら、

空の深いところへ

落ち込みそうになったので

腹ばいになってアリを見た。

洋服ぬい。

かた紙書いて、フーできた。

かた紙切って、キャーキャーキャー

布じにあてて、アーアーアー

布じを切って、ヒーヒーヒー

布じをあわせて、

しつけをかけて、

ミシンをかけて、

カタカタカタカタ

カタカタカタカタ

ああくたびれた。

まだできない。

考えること。

「ねえ、クラムボンて何だと思う？」

となりにきいたら

「アメンボウでしょ」と、

きまりきったようなことをいう。

そうかなあ。

どうもちがうきがする。

だいいち、きょうかしょの丸おぼえですますなんて

昔から、

「人げんはかんがえるあしである」

とか、

「われ思う、ゆえにわれあり」

とか、いうじゃないか。

かんがえることをしなくなったら、

人間じゃ、なくなっちゃう。

冬　I

冬将軍は雪の女王の家来です。

しもは冬将軍の来る前ぶれです。

しもばしらは冬将軍の通った後です。

冬　Ⅱ

雪の女王はなによりえらい

寒さはかの女の手の下に

雪の女王が来る時は

ヒラヒラ雪がまいおりる。

かの女の通ったそのあとは

キラリキラリと氷が光る。

ある冬の朝

朝もやたちこめ、日がのぼる。

キラキラ輝く水の玉。

家々の屋根をつつみこみ、

白くけだかく流れゆく。

ふだんみなれた住宅地

白いのはらに変わってく。

太陽もっと高くなり、

もやはやんわりうすらいで

輝く屋根があらわれる。

キララ キララ キラリ

キララ キララ キラリ

しも　Ⅰ

自動車カバーについている、しも。

けとばしたらバリバリッと音をたてた。

小鳥がピピピピーッといって

おこった。

「あたしの手」　　（１年、とおやましがこ）

まこおねえちゃんの手、あったかいねえ。

しがこ、ストーブであっためても冷たいんだよ。

さむいねぇ。冬って。

炎

炎は 命を持っている。

酸素を吸って二酸化炭素をはく。

物を食べる。

火は生きている。

生物だ。

なのにみんなは

そまつにあつかう

友だち　I

いやな友だちいくらもいるが、

とくにいやなのたぬきが二ひき。

春田ぬきにふじたぬき、

悪口、ぞうごん、かげ口、ひにく、

よこ目でながめてこそこそしゃべる。

どうしてあんなにしゃべるのか。

ああ はらがたつはらがたつ。

まあまあかってにしなさいよ。

私はキャメイじゃありません。

私

私、かっこつけてる。

私、せのびしてる。

でも、

私は私、

しかたがない。

朝

** ジリジリジリ〜〜!!!! **

** ものすごい音にはねおきて、**

** とっさに時計に手をのばす **

** 毎日こうとはなさけない。**

** ショック死するよ、**

** この音は。**

友だち　Ⅲ

** やい、小野田、よっくきけ。**

** おまえはえんりょというものをしらんのか。**

** 私がおまえのチームに入ったからって、**

** まけるとはかぎらんだろ。**

「負ける、負ける。」とさわがれちゃ、

** うてるところも うてないぜ。**

** スポーツうまけりゃえらいのか？ **

** あんたにゃ「心」がないじゃない。**

** 私もやさしかないけれど、**

** あんたみたいに いわないぜ。**

男の子、

男の子って てれやね。

思ったとおりに

すなおに言えない。

とくに女の子のことは、ね。

なんでもさかさに

言ってるの。

なんか、かわいいねェ。

** まぁ、そう思っておけば **

** ケンカになるまい。**

がまん。

あんなにバカにされてるのに。

なぜ

がまんしなきゃ いけない？

あんなに いやがってるのに、

なぜ

入らなきゃ いけない？

私だってクリスマス会はやりたい。

だけど、

あんなに言われてまで やりたくない。

どうして？

どうして私は きらわれるの？

どうしてそんなにいやがるの？

顔が悪いから？

頭が悪いから？

スポーツ ヘタだから？

そんなはず ない。

顔が悪い人 いくらでもいる。

私より頭の悪い人 多い。

とびばこすらとべない人 いるじゃない。

なのになぜ？

（無題）

口が大きいと人は言う。

顔が悪いと人がいう。

顔が悪いのはしかたがない。

もって生まれた顔だもの。

だけど、

前は口だって小さかったんだ。

２年のころからいじめられ、

事あるごとにケンカして、

つかみあっても かちめはない。

口でいうしか 方法ない。

そんな事をしているうちに、

口が大きくなったとて、

なんのふしぎもあるまいさ。

なぜ私はここにいるのだろう？？

なぜ私は人間なんだろう？

私は、

六年間

あっという間に行ってしまった。

かけさった時は、もうもどってこない。

何もしなかった。何もできなかった。

後にのこるのは後かいだけ。

ただ……

（無題）

彼女らは

笛をふいても おどらない。

ピアノをひいても 歌わない。

ぶたいはこんなに広いのに、

みんなニコニコ見てくれてるのに

なんでみんなはおどらない？

オズオズと、おどっているのは

五、六人、

全部合わせて百人いるのに。

（無題）

だだっぴろい野っ原に、

ドデンとイバラがじんどっている。

イバラのしげみはトゲトゲチクチク。

中にはケイトウ、ハゲイトウ。

少しはなれてスミレが一つ。

イジケたアジサイ スミの方。

デンといすわる白スイセン。

オダマキ、クモとわるふざけ。

よるねず本読む子への罰。

ねむれないよ。

ねむくても ねむれないよー。

かくれて本読む子への罰

ねむいのにねむれないよー。

ねむれない、ねむれない。

少女もまた、ねむれない。

さびしい

さびしい

さびしい

だれかたすけて。

卒業前の一年間

一年前に詩を書いた。

『六年生』という詩を書いた。

「小菅ヶ谷小には何もない」と、書いた。

たった一年前の事、

けれど今、

ととのえられた校舎から、

私たちは旅出って行く。

はんぱな春休みに。

（はんぱな春休みに。）

（はんぱな春休みに。）

シュークリーム

小麦粉、バター、ふくらし粉、

こねたり、まぜたり、こぼしたり、

それでもなんとか

やきあがる。

クリームはさんで－

ア、おいしい。

奥付

奥付

春まだき（1）

../../book/20297

柊実真紅（とうみ・まこ）

as
著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
../../book/20297

電子書籍プラットフォーム：パブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

春まだき　（1）

著　　霧樹 里守（きりぎ・りす）

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社